

短歌の実作と秀歌鑑賞

担当講師 沢口 芙美（歌人）

巖流島の松毬

沢口 芙美

注連飾り家々に違ふを見てあゆむ二年つづきの喪中のわれは
戌年に犬連れもろし初詣でことし犬見ずまして羊は
冷えとほる元日の道お清めの塩のごとくに降れる初雪
レモン一個買ふ人おせちを買へる人元日のスーパーほどほど
に客

餅はあも豆腐はおかべと女房言葉ゆかしく食ぶ新年のあも
ふくらかな黄の大輪のバラの束喪中を気づかふ人より賜
歌にせむ拾ひて机に置きしまま巖流島の松毬ひとつ
半年を机におく松毬乾ききり木彫りの花のごとくにひらく
小次郎を祀る社のつつましくよすがに拾ひき色よぎ松毬
巖流島は無人の小島 小次郎、武蔵たたかふ像を今に立たせ
て

法螺の音の

金子 ふみ子

法螺の音の聞ゆる羽黒山の参道に苔つややかに濡れて息づく
跡継ぎの定まらぬ里の義兄より新米届く淡くひかりて
ポステイングの見知らぬ人の指を咬む郵便受けは口こじられ
て

黒ヒールに若き眉あげ税務官わが小商ひを探らむと来つ
税務官帳簿を包む風呂敷を下げ山茶花の咲く道に消ゆ
出雲崎良寛の地を訪へば「ええ身分やな」 姫は笑はず
「買うてくれ」 姫は手押し車より里芋菊花われに差し出す
内ポケット覗く時に首傾ぐる男より立つ獣の匂ひ
紙漉の武州小川の細川紙楮に山のかそけく匂ふ
紙漉女掌あつく輝われて無言の行の気迫に満ちる

望みをいだけ

喜多すみえ

アルバムを繰れば「シュワツチ」の声きこゆ赤服うれし小ウ
ルトラマン
待ち受けの画面に四人の笑顔貼りクラスメートに励まされお
り
住宅地の馬頭観音碑うせてよりマリーゴールド、パンジー咲
きゐる

新築の二世帯住宅できあがり庭に濡れゐる足踏みミシン
朝まだぎ伊東の山架け立つ虹に元乙女らも望みをいだけ
台風の近づくとき知り腹太く竿に揺れるる蠅螂移す

庭隅の無花果熟れて口あくに翅光らせてカナブン群るる
足を病む嫂あねから届くよちよちメールポストに行けぬと達筆の
来ず

本抛地の美術館出でて旅をする「落ち穂拾い」にまたもや会
へず

隣りあふ柵より熨斗の袋購ふ今日お悔やみに明日は慶事に

区切りの時

小林 初美

仏壇にトルコききょうをお供えし義兄あにらと偲ぶ義母ははの命日

紅葉のはじまりも良き金閣寺合唱団の先輩と見る

改装せる東京駅と新幹線をビルより眺む秋のひととき

丸の内若かりし日の仲通り「女の子」時代の私がそこに

友の死を喪中葉書に知らされぬ夏にはすでに亡くなりいしと
は

ノーベル賞マララの気高き演説にテロリストらは学校襲う

希望者多きまりやのチケット大当たり登紀子さんの額もさら

に引き当つ

※まりや || 竹内まりや 登紀子さん || 加藤登紀子

神戸にて異人館に入りたり震災の記録いまだ展示す

施主として三十二年の時を想い法事終えたり青空仰ぐ

亡き夫の追悼文集今読みて「明るい母」になれたか自問す

十葉しろじろ

小出 加津代

星の精が降りきて花と化したるや十葉しろじろ暮れゆく中洲
に

ものがたり日々語りつぐごと朝顔は色あざやかにけふの水色

朝顔の葉先に宿る露さやか みどりごとに二本歯の生え初めぬ

真夏日の水面を左右に切りながら音無川を一羽の鴨ゆく

初誕生日キティちゃんリュックに切餅を一ヶ背負ひて梨奈は

はしゃげり

高窓に動きわづかに夏雲は形変えゆく夕あかねして

秋祭りに母の蒸したる毬まんぢゅう羊雲うかび郷愁は不意に

逆光におのおのの個性透けて見ゆ楓一葉一葉の命

木漏れ日は障子に揺れて光の輪かぞへかぞへて幼と遊ぶ

ものうげにいづこを視てゐむ白鷺は細き脚たて冬の目を浴ぶ

馬場歩みゆく

早石 恵子

母の荷にまぎれしままの雛人形小暗き箱に眸をひらきゐむ

春わかば夏の木の蔭秋の黄葉長き信号を公孫樹と待つ日日

解かれたるマンデラ氏に歯の少なかりき むらさきあはく

ジャカラダ咲く

小さき貝連ねし風鈴ちりりんと鳴ったかもしれぬ夜更けのあ

の店

雨の中レインコートなき犬を見て飼い主に目を遣る非難がましく

馬二頭にはふは楽し街ながら垣に萩咲く馬場歩みゆく

公園のはづれに撒かれし餌をめがけ鹿数十頭は争ひ走る

身にまとふ黒のとつくりセーターが一世を語る晩年の高倉健
促され幼は「ありがとう」と叫ぶ電話のそばに焦れるたるらし

『徳川家康』 十八巻を手放してしばらく夫は空間を埋めず

